



最近の施工例

私の町の楽しい新聞

フォーラム

NEW マルコシ宣言 Nothing NO!

わたしの町のフォーラム 3万2000世帯へお届けしています

■豊かな街づくりを願って、自然派リフォーム「マルコシ」がお届けしています。
 ■配布地域/安佐北区 中区 東区
 ■年4回発行。
 ■編集・発行/マルコシ・フォーラム編集室
 〒739-1731 広島市安佐北区落合4-1-7 ☎843-9981

URL: <http://www.marukoshi.jp>

マルコシ リフォーム 検索

かつて西日本随一のニュータウンと称された高陽の団地群は、とうに成熟期を通り越し高齢者中心の町と姿を変えた。核家族化の弊害なのか若者は姿を消し、高齢者の独り暮らし、二人暮らしが増えている。二人暮らしとは高齢者夫婦のみならず、未婚の子どもと親のペアも少なくない。高齢者独り暮らしの住まいはいつものまにか空き家になって取り壊され、一つの敷地に半洋風の二つの家が建ち、若い親子ファミリーが暮らし始める。向う三軒両隣の絆は細いものの、新しいス

住まいの物語 13

～縁側のはなし～



最近の団地内の新築建売住宅を見ると、三方は隣地との境界に接しており、せいでい物置や倉庫、あるいは通路にしか使えない。少し広く空いている面は駐車場になっている。しかも二台分のスペースが必要な時代。その面に縁側のようなあまいなスペースを造るよりも、部屋としてのスペースを少しでも広く確保するのが今風という。中秋の名月を観賞するために縁側を必要とするものなら、それは古い人間の感覚に過ぎないとい蹴される。桜の季節の臘月、研ぎ澄まされたような初秋の月など、いまどきは関心を持たれない。住まいから縁側を消したのは、特別の理由はなく単に必要だからという。もしも十分にスペースがあったとしても、それは他の用途に振り向けられるに違いない。

日本の自然観賞には、時と場所と作法を間違えないしきたりがあった。中秋の名月は、残暑も過ぎ、大気も牙々として透明感が月面に映える頃。やはり外気の中で見たいものである。池を挟んで築山の木立の間に昇る月を愛でた日本の暮らしの文化に及ばないまでも、軒先で邪魔な景色を遮り、なにか点を添えて月を観賞し、その世界に感情移入したいものである。中秋の名月の観賞には、やはり縁側がよく似合う。

タイルの暮らし方が生まれる。これらの新しい住まいはかつての日本風の建物とは似ても似つかぬ近代的な密閉式が多い。外から中の様子はうかがえない。瓦屋根の軒がない。縁側がない。門や植栽の緑がない。まるで訪問者を拒否しているような雰囲気がある。かつての町並みが懐かしく思える。



ふるさとの縁側

古代、日本の庶民の住まいは竪穴式住居を主流としていた。地面を掘り下げて床を造ったのは、建物の軸部を高く築き上げることが技術的に難しかったからに過ぎない。掘り下げた穴の周囲を壁として利用し、上から蓋をするように屋根を被せた。軸部を立ち上げてから、土間床の生活習慣は長く残り、伝統的民家の土間の様式に繋がっている。しかし、こうした土間式では縁側は発生しうがうがない。一方、古代からすでに

縁側の発生をたどる。その縁の意味を考えてみる。まず第一に縁がある。と上がりやすい。第二に注目すべきは、建物を立派に見せる働きをしていることである。特に縁には高欄が付くので余計な効果を高める。建物の周囲を縁側が取り巻く因縁の形式は、その建物などの方向からも注目されたことを示している。注目したいのは奈良県の佐味田古墳から出土した「家屋文鏡」にある。入母屋型屋根の高床建物で、そこにはベランダのような露台が付いている。それは外部との関係によって成立する生活機能の場であったことを示している。ただ高床に上がった、格好よく見せるだけでない。建物内部だけでは完結できない機能のために露台が造られた。それは縁側の発生に繋がる。

板張りの床と縁があった建物も多く知られている。たとえば伊勢神宮正殿は奈良時代に今の様式が出来た。しかし、古代の神社本殿の中には住吉神社のように床は張られていても縁のないものもあった。縁の発生をたどることは一筋縄ではいかない。



伊勢の正殿を分析。その縁の意味を考えてみる。まず第一に縁がある。と上がりやすい。第二に注目すべきは、建物を立派に見せる働きをしていることである。特に縁には高欄が付くので余計な効果を高める。建物の周囲を縁側が取り巻く因縁の形式は、その建物などの方向からも注目されたことを示している。注目したいのは奈良県の佐味田古墳から出土した「家屋文鏡」にある。入母屋型屋根の高床建物で、そこにはベランダのような露台が付いている。それは外部との関係によって成立する生活機能の場であったことを示している。ただ高床に上がった、格好よく見せるだけでない。建物内部だけでは完結できない機能のために露台が造られた。それは縁側の発生に繋がる。

竪穴式の建物がだんだん高くなっていったとき、その床に上がるためや建物を立派に見せるため、さらには外部に繋がった何らかの生活のために縁側が発生したとすれば、最初の縁側は建物の外壁の外側に出張するように付けられたはずである。建物の周囲に立つ柱を側柱といい、その側柱の外に出る縁を外縁、もしくは、雨が降り掛かると濡れるという意味で「濡れ縁」と呼ぶ。この縁の形式が徐々に建物の内部に取り込まれていくと、内縁が発生する。側柱から一間分内側に入った柱を入側柱と呼び、この側柱と入側柱の間を解放した板張りとしたものを「入側縁」と呼ぶ。そしてその側柱筋に雨戸など板戸を入れ、入側柱筋に明かり障子などの建具を入れたものが内縁である。当初、入側縁は「広縁」と呼ばれていたが、元来こは屋根根下地を露出させた化粧屋根裏天井で、縁の幅も広いものが多かった。やがてここに半分だけ畳が敷かれたり、全面畳敷きの畳廊下に変化したものもあった。外縁から内縁への変化は、建物の外部と内部のダイナミックな交流よりも内部空間に限定した使い方が重視され、それが緻密になっていったことを示している。尻理屈を並べすぎたが、あなたは中秋の名月を見るのか見ないのか、見るとすれば何処で見るのだろうか。(木原伸雄)

縁側の発生をたどる。その縁の意味を考えてみる。まず第一に縁がある。と上がりやすい。第二に注目すべきは、建物を立派に見せる働きをしていることである。特に縁には高欄が付くので余計な効果を高める。建物の周囲を縁側が取り巻く因縁の形式は、その建物などの方向からも注目されたことを示している。注目したいのは奈良県の佐味田古墳から出土した「家屋文鏡」にある。入母屋型屋根の高床建物で、そこにはベランダのような露台が付いている。それは外部との関係によって成立する生活機能の場であったことを示している。ただ高床に上がった、格好よく見せるだけでない。建物内部だけでは完結できない機能のために露台が造られた。それは縁側の発生に繋がる。

お互い信ずるものが違っても相手を理解しようとする。そこに思いやりが生まれる。理解しようと思ふ気持ちが生まれるだけで、相手が丸くなるから不思議。
 言葉を知らざれば、以て人を知ること無きなり
 声なき声を取り、見えざるものを見る力は、静謐な精神がなければ生まれぬ。相手の言葉を理解する事なしに、その人の魅力を知ることも出来ぬ。

和を貴しと為す
 口を小さく、耳を大きく、相手の言葉を尊重しながら丁寧な聞き取り。和が生まれる。友情や信頼が芽吹く。
 唯女子と小人とは養い難しと為す
 お互い信ずるものが違っても相手を理解しようとする。そこに思いやりが生まれる。理解しようと思ふ気持ちが生まれるだけで、相手が丸くなるから不思議。

凡事徹底
 ほっとする論語より
 人の善を道うを樂しむ
 いいことをしている人を見つけてその行いを人に伝えたら、聞いた人は「世の中捨てたもんじゃやない」と笑顔になり、気持ち双方晴れ晴れする。世の中に伝えるべきはいい話。知らず知らず人に救う。

平成27年 今年の抱負 2015年

大西 由貴 (一念発起)	山田 智恵 (進取果敢)	山野 幸恵 (剛毅果斷)	金本 和宏 (先憂後樂)	江原 文男 (率先垂範)	岡元美紀恵 (二期会)	木原 淳 (敢為邁往)
木原 伸雄 (健康長寿)	今井 香子 (遠慮会釈)	木原 隆男 (一筆風月)	永田美絵子 (活気横溢)	東田 光夫 (緩急自在)	平見 孝志 (公明正大)	大須加 篤 (懇切丁寧)